

フェリックスとゼルダ

梅林中 一年 T S

この物語は、第二次世界大戦時のナチスによるユダヤ人迫害を背景にしたものです。

ユダヤ人である主人公のフェリックスは、わが子の安全を願った両親により、孤児院に預けられます。まだ十歳の子どもだったフェリックスは、「お父さんとお母さんは仕事の関係で子どもを孤児院に預けたのだ。」という大人達の言葉を信じ、両親と再会できる日を待ちながら、毎日を過ごしていました。フェリックスの家の仕事は本屋さんで、小さいころから本に囲まれて育った彼は、本を読んだり、自分で物語を作ったりするのが大好きな子どもです。

そんなある日、フェリックス達が暮らす孤児院にナチスの兵隊がやってきました。ユダヤ人の本を全て燃やしてしまうためです。彼にはなぜユダヤの本が燃やされてしまうのか、その理由が分かりませんでした。

ナチス兵はユダヤの本が嫌いなのだろうか、そのためにこんなひどいことをするのだろうかと思つたフェリックスは、孤児院を出て、実家の本屋を守ろう、お父さんとお母さんを探しに行こうと決心します。

しかし、勇気を出して自分の家のあつた場所に戻つてみると、そこにはもう本屋はなく、知らない人が別の店を営んでいました。家の近くを歩いてみても、周りの人からは白い目で見られるばかりです。周りの人の冷たい態度に耐えられなくなったフェリックスは町を出て行くことにしました。

孤児院という閉ざされた場所、でもつらい現実を知らなくてもよかつた場所から飛び出したフェリックスは、自分の目で、肌で、ユダヤ人の置かれた状況に直面することで少しずつ現実が分かってきたのだらうと思います。

しかし、それでもまだ、「大丈夫。両親はきつと無事でいてくれる。別にユダヤ人が嫌われていくわけではない。」と信じようとするフェリックスの気持ち。それは彼の楽天的な性格や、物語や空想が好きな性質から来るものだと言えなくもないけれど、本当につらいことほど目を背けたくなる、一つの現実逃避なのではないかと思ひました。

町を出たフェリックスは、ナチス兵に襲われ、親を殺されたゼルダという幼い女の子に出会います。彼はゼルダに、彼女の両親が死んでしまったという事実を告げることができません。一緒に旅を続けます。これから先のことを考えたら、彼女に本当のことを伝えた方がよいのかもしれない。でも、自分ですら受け入れがたい現実を幼いゼルダに突きつけることはできないと、フェリックスはきつとすぐ悩んだことでしょう。このことを思うと、僕は心が痛くなってきました。

その後、二人はナチスに捕まり、収容所に連れて行かれそうになります。そこでバーニーという歯医者に出会います。バーニーはたくさんユダヤ人の子どもをかくまっている人でした。バーニーや他のユダヤ人の子どもと楽しく日々を過ごしたのもつかの間、彼らの住みかは見つけられ、とうとう処刑所送りになってしまいます。移送される貨物列車の中で、トイレの紙がなく困っている人たちのために、フェリックスは、親からの唯一

の贈り物である、大事な大事なノートの紙を差し出します。「とても大切なものを親しくもない誰かのために差し出すなんてことが僕にはできるだろうか。空想の世界に入り込むことで現実から逃げていたフェリックスは、大変なことからはすぐ目を背けようとする自分にそっくりだ。」と、初めは共感を感じていましたが、つらい体験が、フェリックスに人の痛みが分かる気持ちを与え、人の痛みが分かるからこそ、それを分かち合う優しさや強さを彼は身につけていったんだと思ひました。

ちよつとした偶然から、彼らは貨物列車から抜け出す方法を見つけます。しかし、それはとても危険な方法です。先に貨物列車から飛び降りた人たちは、機関銃で撃ち殺されたり、うまく着地でさずに死んでしまいます。足がすくんでしまうその状況の中で、フェリックスたちは飛び降りることを選びます。

もしほんの少しでも希望があるなら、それに付けてみようとする彼らの姿に、僕は心からエールを送りたいと思ひました。

ナチスによるユダヤ人への迫害は、人とはこんなに残酷になれるものなのかと、悲しくなるようなことばかりです。しかし、どんなつらい状況下にあつても、人は明るく生きることができ、生きぬくことで、人は強くも優しくもなれる。成長できるものだと実感しました。どんな現実でも、それを受け入れ、向き合っていくことで、人は初めて心に希望を見出せるのかもしれない。この本は、僕に希望をもって生きることの尊さを教えてくれました。